



横浜市立大豆戸小学校

学校だより

よりよい自分をつくる大豆戸の子

～なかよく かしく たくましく 笑顔いっぱい 大豆戸の子～

令和8年9月30日

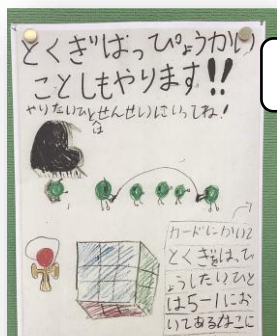
10月号



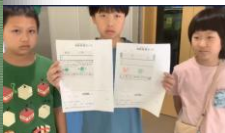
学校ホームページ

「学校」という場所

副校長 松浦 悠樹



特技発表会実行委員の3人



「先生って、なんで先生になったの？」

担任をしていた頃、子どもたちから必ずと言っていいほど聞かれる質問でした。私はいつもこう答えていました。

「学校という場所が好きだから」

では、学校のどこが好きなのか。友達とおしゃべりしながら歩く帰り道が好き。給食のマカロニクリーム煮に入っているエビ（昔は入っていた）が好き。大好きな歴史の授業をしてくれる先生が好き。もちろん、全部が全部好きだったわけではありません。書写で手が汚れるのは嫌だったし、思うように描けなかった絵を飾られるのも嫌でした。月曜日の朝、熱ないかな？と体温計をとったことも。きっと、大豆戸小学校の子どもたちも（保護者の方も）私が抱いたどちらの気持ちも少なからず共感してくれるのではないかと思います。

学校は、特別な約束をしなくても、次の日になれば当たり前のように同じ仲間と集まれる場所です。大人になると、合唱がしたい、ドッジボールがしたいと思っても、習い事をしない限り気軽にはできません。子どもだった私は、そんな学校を自分の居場所だと感じていたのでしょう。その思いが、「学校」という場所が好きという気持ちにつながっていたのだと思います。

先日、大豆戸小学校の恒例行事になりつつある「特技発表会」が行われていました。有志の子どもたちが、自分の発表したい特技を動画で撮影し、全校に向けて放送する取組です。ある日、職員室にやって来た子どもたちが、「今年も特技発表会をやりたいです！」と職員にお願いしていました。聞いてみると、委員会などの活動としてではなく、自分たちの意思で企画しているとのことでした。それから毎日のように、休み時間になると運営のために集まり、準備を進めていました。放送を見た後は、「すごい！」と友達の頑張りを心からたたえる子。普段は見られない友達の姿を見て、「自分もやってみよう」と一歩踏み出した子。とびっきりの笑顔で校長先生から賞状を受け取っていた子。数人の子どもたちの行動が、多くの子どもたちの輝く姿を生み出していたのです。見ていた私も胸の奥から熱いものが込み上げてきました。

「やってみよう」と思うとき、人は無意識のうちに「ここは安心できる場所だろうか」というセンサーを働かせています。子どもも大人も「失敗してもやってみよう。」と安心センサーがある大豆戸小学校を、誰にとっても居場所がある大豆戸小学校を、職員一同大切にしていきたいです。保護者の皆さま、地域の皆さま、いつも見守っていただきありがとうございます。これからも応援よろしくお願いいたします。